

長崎 もり通信

— NAGASAKI FOREST NEWS —



特集▼令和5年度森林ボランティア団体意見交換会を開催しました

- 令和5年度 第1回技術研修会を開催しました
- 森のキセキ 森林資源活用「刈敷農法」

083号

R5. 7月

令和5年度 森林ボランティア団体 意見交換会を開催しました



令和5年7月8日（土）、にっしょうかん新館梅松鶴にて「令和5年度森林ボランティア団体意見交換会」を開催し、森林ボランティア団体16団体22名の皆様にご参加いただきました。



はじめにセンターより、技術研修会及び森林に触れあうイベント（森フェスタ）の開催案内、貸出機材、木育事業、補助事業について説明した後、今回参加していただいた団体の活動内容を一団体ずつセンター長の佐藤より紹介を行いました。次に、日吉自然の家敷地内の広葉樹林を長崎大学のボランティアサークル「エコマジック」とボランティア団体の4団体で整備を行う協働の森林づくりについて報告し、他団体にも参加を呼びかけました。

意見交換では、今後森林ボランティア団体同士が連携して活動することで期待される効果や課題、連携方法等について各班で話し合ってもらい、各班の代表が内容を発表し全体での意見交換を行いました。

連携することで、お互いが持っている技術を習得することができ、技術の幅が広がり、知識・技能を若い世代に残せるなど効果がある反面、団体ごとの安全確保や意識の違いによるギャップの埋め方や、日程調整等の課題も出てきましたので、一つずつ解決しながら各団体と連携が取れる体制を作っていけたらと思います。お忙しい中参加いただいた皆様、本当にありがとうございました。意見交換の内容は、センターのホームページでも掲載していますのでぜひご覧ください。



令和5年度 第1回技術研修会を開催しました

令和5年5月21日（日）長崎市の現川森林公園で、今年度第1回目となる技術研修会を開催しました。今回の参加者は、森林ボランティア団体「TAKE NO EN」の皆さんと、TAKE NO ENで森林について学んでいる大学生や高校生、教員の皆さんなど、総勢30名で実施しました。

研修テーマは「人工林の間伐と活用」について。TAKE NO ENの皆さんはこれまで、森林ボランティア活動として竹林の整備を行ってきましたが、人工林の整備は初めてです。また、学生の皆さんは、TAKE NO ENで森林整備の必要性や大変さ、森林の未来について学ぶ中、今回森林での実習として参加をしていただきました。

森林に入る前に先ず、人工林とは何かというところから説明を行いました。その後、参加者の皆さんで、間伐された森林と間伐遅れの森林を見比べ、光の差し込み方や林床の違いなどを観察しました。間伐を行う事で樹木は大きく成長します。その他にも林床に光が差し込むことから下層植生の発達が促進され、土砂災害等を防ぐなど、手の行き届いた森林では様々な機能が発揮されるという事についても説明をしました。

人工林や間伐について学んだ後は、実際に林内に入り伐木のデモンストレーションを行いました。今回は安全面を考慮しロープと滑車を使用した伐木で、大学生の皆さんにロープ引きをお手伝いいただきました。見学していた皆さんは、倒れた時の大きな音と跳ね返りを目の当たりにし、1本の木を倒すことの大変さと危険さを感じていたようでした。

その後は、伐木班と枝払いや玉切りを行う作業班に分かれ、それぞれ指導を受けながら実習を行い、最後に玉切りした木を搬出するところまでを体験してもらい閉会しました。実施後のアンケートでは、伐った木の活用について関心が高まったとのご意見もいただきました。ご参加いただいた皆さまありがとうございました。



枝払い・集積



ロープを引き伐木する様子



丸太でコースターを制作

森のキセキ … 森林資源活用「刈敷農法」…

軌跡

里山林の資源利用方法の一つである「刈敷農法」をご紹介します。これは、まだ日本各地に里地里山が形成されていた頃に盛んに行われていた農法であり、里山林の資源を余すところなく利用しようという先人の知恵が詰まっています。当時、水田に投入する肥料のほとんどは刈敷でした。今でも一部の地域では刈敷農法を行っており、特に九州では多く見られます。

林内の落ち葉を掻いてそれを堆肥として利用するほか、広葉樹の若葉を枝ごと刈り取ってきて水田に敷き込むことで肥料にすることができます。水を張った田んぼの底に萌芽したばかりの枝を敷くと、柔らかい新芽や樹皮は分解され、稲が育つ栄養になります。特にコナラやクヌギはよく利用され、間伐した際、残った切り株からすぐに新しい枝が出ることや、新葉や新芽が柔らかく分解されやすいなどの特徴があることから、刈敷農法に適しているとされています。あえて地上2~4 mの最も日が当たりやすい高さに伐り残し、そこから出る新しい枝だけを伐って利用する「台場クヌギ」は、里山林が水稻栽培に利用されていた証として残されています。

里山林の資源利用としてシイタケ栽培や薪炭材などもよく知られており、人と里山の関係が密接だった頃の利用方法を参考にしているケースが多く見られます。里山林の荒廃が問題視されている昨今において、森林資源の価値を見出すことは問題改善の潤滑油になるのではないのでしょうか。当時の人々の活用方法に倣って、資源利用の幅をより一層拡大していきたいところです。



間伐した木の枝の集積



センターからのお知らせ

センターのホームページはこちら→



今年も11月3日(祝)に「ふるさとの森フェスタ」を行う予定です。長崎県民の森の遊具がある冒険の森アスレチック広場横の駐車場及び広場を使って森林体験ブースを設置しますので、子供たちに森の楽しさを教えていただける団体さんを募集中です!



昨年度の様子

登録団体の皆様へ 7月分の活動報告は、8月10日までにご提出ください。